

PHAYAO レポート 2016-01 (徳島大学 岡村英作)

(2016.8/19~27)

シャンティ山口の活動に参加して

～本当の支援とは何か～

徳島大学総合科学部社会総合科学科 1年 岡村 英作

私がシャンティ山口に初めて出会ったのは、高校2年生の時、今から約2年前のことだ。1ヶ月のインド滞在を終えて、国際協力や国際貢献をしたいと思い、地元山口で開催されたイベントに参加した。そこで、今回大変御世話になった佐伯さんから長時間お話を聞いたのを覚えている。何かのご縁なのか、大学へ進学後、何気なく参加した授業でシャンティ山口のスタディツアーがあると聞き、すぐに応募した。タイでは、高校生の時間いたお話が鮮明に蘇ってくるとともに、多くのことを考えさせられる良い経験となった。

私はシャンティ山口の事務所があるチェンカムに直接行ったわけではなく、バンコクに数日間滞在して、チェンライに向かった。バンコクでは異国情緒に触れ、とても楽しい時間を過ごせた。バンコク、特にカオサン通りは観光地化していて、ほとんど何でもあるという印象を受けた。服も、アイスも銀行も、ファーストフード店も。もちろん綺麗なトイレだってある。日本とそんなに変わらない。日本人があっても当然と思うようなものは、みんな揃っている。日本と違うのは売っているものが少し違うだけだ。そんなバンコクの風景を脳裏に焼き付けながら飛行機でチェンライの空港に向かった。

空港に着くとすぐに、バンコクと違う雰囲気を感じた。圧倒的に緑が多い環境だった。チェンライでは大学訪問をして、その後、お世話になった現地のコーディネーターのジッポンさんの運転でチェンカムへ向かった。最初にシャンティ山口の活動の一つである、エコトイレについての説明を受け、実際に使われていたエコトイレの見学に行った。パイプに何やら仕掛けがあったのだが、聞くところによると植物を水耕栽培しているらしい。トイレから出た水で野菜を栽培すると聞くと、少し抵抗があるかもしれないが、絶好の環境だそうだ。常に今の環境に満足することなく、新しいことに取り組む佐伯さんの姿を本当に尊敬する。

エコトイレの仕組みは、数学嫌いの文系の僕でも仕組みは理解出来るほど簡単だった。排泄物が嫌気処理で浄化され、もっとも綺麗な部分が次のタンクに行き、またそこでも嫌気処理が行われ段階的に浄化されていくという仕組みだ。結果的に放出される水の中には大腸菌はもちろんいないし飲料もできるという。また、この仕組みには電力を必要としない。加えて、嫌気処理の過程でメタンガスが発生する。このメタンガスは、保育園の給食の煮炊きに使用している。さらには、廃水に栄養分(H・P・K)が豊富に含まれていることから、これを野菜の肥料として畑に引いている。まさに、エコトイレである。このエコトイレは、シャンティ山口の関わる施設のほとんどに設置されている。

事務所を後にして、シャンティ学生寮へ向かった。ここでは、寮の全体をお世話しているガランさんに大変お世話になった。私より年が少くない学生たちと一緒にご飯を食べたり、田植えをしたり、卓球をしたり。若干体調が優れなかったため、寝ている時間も多かったのであまり交流することはできなかったが、田植えの時はお互い拙い英語で楽しく作業ができた。ここでは、貧困家庭や学校から遠く通えない少数民族の子供たちが共同生活している。起床は早朝で、食事は自分たちで全て作る。シャンティ山口では希望者が多い時期には入寮希望者とその親と面接をして、入寮する子供を選んでいるという。他の団体の学生寮ではいろいろな制約で入寮できなかつたり、同一宗教でなければ入れないなど条件があったりするが、シャンティ山口では、親のいない子・家族に障害者のいる家庭・経済的な条件や、学校までの距離などを考慮して学習意欲のある子供たちを積極的に受け入れている。また、自立をキーワードとしているため、寮生が豚や鶏、池には魚を育て、稲を栽培し、当番でみんなの献立を考えたりしている。ただ、与えるだけではなく、支え、助け合い、結果的には支援がなくても自立できるようになってほしい、という暖かい思いの詰まった学生寮だった。

寮の山の畑にも連れて行ってもらった、急な斜面にトウモロコシやドラゴンフルーツやマンゴーが一面にぎっしりと植えてあった。今まで食べたマンゴーの中で一番美味しかった。ガランさんはここでの果樹に化学的な農薬や肥料を一切使用しないという。その背景には、遺伝子組換えトウモロコシの急速な拡大がある。

次に訪れたホイプム村では、念願のホームステイを体験した。この村も遺伝子組換えトウモロコシと深い関係がある。数年前まで、この村のトウモロコシはほぼ遺伝子組換えトウモロコシだったそうだ。遺伝子組換えトウモロコシを栽培し続けた結果、農薬により雑草も生えなくなり、土地が痩せていった。そうなると、新たに農地が必要となるため森林を伐採する必要があるが出てくる。その悪循環が続き、山の木々が徐々に失われていった。村の将来に希望を持たなくなった若者は村を出て行き、ますます村の維持は困難になった。

そこで、すでに各家庭にエコトイレを設置するというプログラムでホイプム村に支援に入っていたシャンティ山口が、次の新たなプログラムを始動させた。それが、遺伝子組み換えトウモロコシを完全にやめて果樹に切り替えるというものだ。このプログラムの最も驚くべきことは、村民全員の同意を得て開始したということだ。当然、果樹を植えてもすぐに収穫できるわけではない。収穫までの収入は激減するのである。なぜ、全員同意するに至ったのか。これには、ここに住む少数民族モン族のホイプム村での歴史にある。それにしても、トイレだけにとどまらない活動の幅広さには尊敬する。

ホイプム村に住むモン族は、ラオス内戦で戦火を逃れてタイにやってきた。今から約40年前のことだ。やがて、モン族はホイプム村に家建て、畑を耕し、家畜を飼い、定住し始めた。今いる村民の先祖が努力奮闘しこの村の基盤を作り上げたのだ。しかし、数年前までは、先述したように遺伝子組み換えトウモロコシ栽培により自然は破壊され、村の将来は危ぶまれた。しかし、そんな思い入れのある土地を簡単に手放すわけにはいかないという村民の思いから、シャンティ山口は支援を決めたという。

私は、高校時代に遺伝子組み換え食物また、それを生産する上で必要となる除草剤の危険に関するDVDを視聴した。健康被害が必ず出るとは断言できないが、特に除草剤によって健康被害の可能性が高まる、また実際に除草剤によって発生したと思われる健康被害がある。危ないものにわざわざ手を出して、種セットを買うために多大なお金を払い、流通社会に依存しては自立なんてできない。そこで、佐伯さんをはじめとするシャンティ山口が村民とみんなで話し合っって果樹への切り替えを決めたという。

ここまで、シャンティ山口の歴史を私が聞いた限り記してきたが、私が最も感動したことがある。それは、銀行も、ファーストフード店もないけれど、何かがあるということだ。その何かは、私は住民同士の仲の良さだとも思う。村を少し下ると唯一の憩いの場でもあるサッカー場がある。農作業でクタクタに疲れた日でも、雨が降っていなければ大人、子供関わりなくみんなでサッカーをしている。女の子は周りで応援している。なかなか見られない光景だった。ちなみに今ではホイプム村の人口は増加しつつあるようだ。そこにあるのは、心ゆたかなコミュニティだと思った。

佐伯さんは、目標を100パーセント達成することは、当たり前。それに加えて目に見えない何かを得ることが本当の成果だと言っていた。シャンティ山口では、エコトイレも現地の人と一緒に作って壊れた時には自分達で修理が可能ないようにしているし、山に道路を作る時も村民全員参加で協働し、果樹への切り替えも村民全員の合意のもとで活動をしている。このような、与えるだけではない、協働の精神がこのような素晴らしい結果を生み出し続けているのだと思う。

私たちは、普段国際協力、国際貢献と言ったら何を思い浮かべるだろうか？一番身近なものは、募金だと思う。しかし、そのお金は適切に、恵まれない子供たちに使われているのだろうか？また、一方的に与えるだけで彼らの自立を妨げていないか？本当の支援とは何なのかを真剣に考えさせられた実りある時間だった。今後国際貢献に関わる機会があったら、今回のことを思い出してしっかりと情報を収集しどんなことでも、意味のある行動をしていきたい。

最後に、今回のこの貴重な体験を提供し、サポートしてもらったシャンティ山口のみなさん、そして、タイ語もモン語も全くわからない僕を家族のように温かく迎えてくれたK君一家には本当に感謝したい。ありがとうございました。



事務所での竹看板づくり



ホイプム村保育所訪問



ホストファミリーとのお別れ

—岡村 英作—